

中学校における「剣道」の授業実践 —生徒の剣道に対するイメージに着目して—

(保健体育講座) 糸 岡 夕 里
(保健体育講座) 日 野 克 博
(伊予市立北伊予小学校) 中 岡 祐 紀
(和光市立第二中学校) 佐 伯 沙 織
(附属中学校保健体育科) 池 内 裕 紀

A Class Practice of “Kendo” at Junior High School —Focusing on the Image of Kendo That Students Have—

Yuri ITOOKA, Katsuhiko HINO, Yuki NAKAOKA, Saori SAIKI

and Yuki IKEUCHI

(平成23年6月10日受理)

I. はじめに

平成20年3月28日に告示された中学校学習指導要領(文部科学省, 2008)において, 現行の学習指導要領(文部科学省, 1999)では領域選択であった「武道」が, 中学校第1・2学年で必修として位置づけられ, 平成24年度より完全実施となる。しかしながら, 従来, 選択領域として位置づけられていたこともあり「武道」に関する実践報告は少なく, 新学習指導要領に対応した「武道」の教材開発がこれまで以上に求められる。

中学校体育授業における武道の課題として, 「道具や施設が揃っていないこと」「女子が武道を選択する割合が少なかったこと」「教師自身の指導経験が少ないこと」などが指摘されている(柴田, 2008)。「道具や施設が揃っていないこと」に対しては, 武道場のない学校での柔道や剣道具のない学校での剣道の指導方法の工夫や開発が必要であると述べている。また, 「女子が武道を選択する割合が少なかったこと」に対しては, 技術指導では男女で相違はないが, 体の発育の特徴や心理的な特性などに配慮し, 武道の楽しさを味わわせることができるような指導を工夫しなければならないと述べている。「教師自身の指導経験が少ないこと」に対しては, 専門的な知識や技能を有する運動部の顧問がいる場合, 適切

な連携を取り, 具体的な指導方法の助言を受けたり, 運動部員に見本を示させたりすることで授業を展開することが有効であると述べている。同様に, 教師自身の指導経験が少ないことが課題であるため, 授業の組み立てや指導内容の創意工夫が必要であると述べている(岡嶋, 2009)。すなわち, 条件が整っていない学校での授業の組み立てや授業実践モデル, 指導内容や指導方法の検討が必要と考えられる。

また, 生徒からみると剣道は, 暑い(寒い), 痛い, くさい, 恐いなどの否定的イメージが強い傾向にある。特に, 中学校の女子に関しては, 球技などの対人的なスポーツや格闘技を敬遠する傾向があるため, 剣道に対しても好感を抱きにくい可能性が考えられる。

そこで本研究では, 剣道の授業実践を通して, 剣道に対するイメージの変容を検討することを目的とした。生徒の剣道に対するイメージが好転するよう, 学校現場および大学の教員, そして剣道の専門家と共同で授業モデルを作成し, その実践を通して, よりよい剣道の授業にむけた成果と課題について検討する。なお, 教育現場では必ずしも剣道具が揃っているとは限らないため, 剣道具ありの授業と剣道具なしの授業の2実践を事例的に検討することとした。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

本研究では、剣道具なしの竹刀のみを使用した授業を実践Ⅰ、剣道具ありの授業を実践Ⅱとして2実践を実施した。表1は、実践Ⅰ（剣道具なし）、実践Ⅱ（剣道具あり）の生徒および時期についてまとめたものである。なお、実践Ⅰ（剣道具なし）および実践Ⅱ（剣道具あり）の調査対象となった生徒は異なる。

表1 対象授業の生徒および時期

	生徒	時期
実践Ⅰ（剣道具なし）	中学校2年生 （男子20名、女子20名）	2010年1月18日-2月8日
実践Ⅱ（剣道具あり）	中学校3年生 （男子20名、女子20名）	2010年11月1日-11月26日

2. 剣道の授業構想

1) 単元計画および単元目標

実践Ⅰ（剣道具なし）では6時間という短い時間数であったため、「面打ち」のみに焦点をあて、「面打ち」における基本動作の習得をねらいとした。図1は実践Ⅰ（剣道具なし）の単元計画、図2は、実践Ⅱ（剣道具あり）の単元計画である。

実践Ⅰ（剣道具なし）では、生徒に何を学ばせたいのかを明確にするため、学習の目標をより具体的に、より簡潔に示すように工夫した。ここでは、剣道において重要とされる「気・剣・体」に焦点をあて、「気」を大きな声、

「剣」を竹刀の真っすぐな振り下ろし、「体」を正しい姿勢とし、生徒が理解しやすく、また教師からみても指導しやすいように単元目標を設定した。

単元目標の技能では、「大きな声、正しい姿勢で刃筋の通った面を打てるようになる」、態度では、「分担した役割を果たすことができる」、知識、思考・判断では、「武道の特性や伝統的な考え方を理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができる」とした。

実践Ⅱ（剣道具あり）では9時間という時間数で、「攻防」に焦点をあて、剣道具を身に付け、しかけ技・応じ技の技能の習得をねらいとした。剣道具ありの授業では、生徒が剣道具を装着して「攻防」の楽しさを味わわせられるよう工夫した。

実践Ⅱ（剣道具あり）では、実践Ⅰ（剣道具なし）と同様に、「気・剣・体」について、「気」を大きな声、「剣」を竹刀の真っすぐな振り下ろし、「体」を正しい姿勢とし、継続した指導を行った。

単元目標の技能では、「しかけ技や応じ技を用いた簡単な試合で、攻防を展開することができる」、態度では、「剣道の学習に積極的に取り組み、自己に応じた得意技を見つけ、攻防の仕方を工夫することができる」、知識、思考・判断では、「伝統的な行動の仕方を大切にし、相手を尊重したり、自らを律する心を理解することができる」とした。

時間	1	2	3	4	5	6
10	<オリエンテーション> 学習のねらいと内容の説明	黙想 前時の復習及び本時の流れの確認				
20	・ビデオ鑑賞 剣道特有の礼儀作法 ・黙想、座礼、立礼 用具の名称・行い方	<基本動作の習得>		<基本となる技の習得(面打ち)>		<判定試合>
30		構え方 ・竹刀の持ち方、構え方 ・正しい姿勢 ・竹刀の納め方	足さばき ・足さばきの説明 ・④すり足 ・⑤一足一刀	打突練習 ・⑦三挙動(物打ち)	⑩一挙動 ・一挙動の説明 ・足運び ・一連の動作 打ち込み練習 ・⑨打ち込みリレー	単元の復習 ・⑥三挙動 ・⑦三挙動(物打ち) ・⑩一挙動 班別対抗判定試合 ・行い方の説明 ・判定試合
40	竹刀体操の説明 ①竹刀打ち	振りおろし ・②バレーボール打ち ・③新聞紙切り	素振り ・⑥三挙動(素振り) 判定試合(三挙動)	⑧打ち込み ・踏み込み足 ・残心 判定試合 (打ち込み)	判定試合(打ち込み)	
50	本時のまとめ・黙想					

図1 実践Ⅰ（剣道具なし）の単元計画

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	<オリエンテーション> 学習のねらいと内容の説明 ・既習の学習内容の復習 ・礼法 ・有効打突の条件の確認	黙想 前時の復習及び本時の流れの確認 竹刀体操 素振り 切り返し							
20	・気・剣・体の一一致した面打ち								
30	剣道具の付け方・片付け方 ・剣道具の名称 ・剣道具の装着の仕方 ・片付け方	打突 ・面打ち	面打ち ・剣道具を装着せず、刃筋の通った面打ちの復習 剣道具を装着	③切り返し ①竹刀崩し	小手打ち 胴打ち	小手・面・胴 小手・面	②竹刀打ち しかけ技 払い面 ・払い面 払い小手 ・面・面	応じ技 ・出ばな面 ・面返し面 ・小手抜き面	グループで得意技の練習 ・基本技 ・しかけ技 ・応じ技
40			面打ち ・その場での面打ち	面打ち	引き面				グループで得意技を用いた簡易な試合
50	本時のまとめ・黙想								

図2 実践Ⅱ（剣道具あり）の単元計画

2) 教材の工夫

学習意欲の向上や基本的な動き・運動感覚を習得できるように教材の工夫を行った。表2は、実践Ⅰ（剣道具なし）および実践Ⅱ（剣道具あり）の教材一覧について示した。

実践Ⅰ（剣道具なし）では、全日本剣道連盟（2009）による指導書「剣道授業の展開」の「学習指導の工夫」から、基本となる5つの動きを身に付けられるよう、9つの教材を実践した。

「打つ」動きを身につける教材として、①竹刀打ち、②バレーボール打ち、③新聞紙切りを行った。足さばきを身に付ける教材として、④すり足、⑤一足一刀を行った。打突を身につける教材として、⑥三拳動（素振り）、⑦三拳動（物打ち）を行った。「打つ」「残心」の一連の動きを身につける教材として、⑧打ちこみ、⑨打ちこみリレーを行った。

実践Ⅱ（剣道具あり）では、「攻防」に必要な中段の構え、切り返しの2つの動きを身に付けられるよう、3つの教材を実践した。

中段の構えは、基礎の構えであり、剣道の構えの中で一番大切な構えである。相手の正中線上に中段の構えができる教材として、①竹刀崩し、②竹刀打ちを行った。有効打突は、「気・剣・体一致の打突」をすることが求められる。その動きの習得を目指し、教材として③切り返しを行った。

また、実践Ⅱ（剣道具あり）では、剣道具装着に時間がかかりすぎるという課題（山神，2009）があることから、剣道具装着の時間短縮の工夫を以下のように行った。

垂の装着は、左右の垂紐を後ろへと回して締め、緩めないように後ろから前に回し装着することとした。胴の装着は、胴紐（上）を胸乳革に結び、胴紐（下）を結び装着する。初心者が装着をする際、正しい高さに装着できなかったり、紐が緩くなってしまったりすることが多くある。そのことから、左右胴紐（上）や胴紐（下）を結ぶことが難しいところは、ペアで協力し垂や胴の高さを確認しながら、正しく装着するようにした。手ぬぐいの装着では、授業前にキャップ式に作成することを指導した。面の装着では、ペアで正しく装着できているか、確認しながら行うこととした。授業で使用した剣道具が新しく、面は特に締めにくい状態であった。このことから、面紐を締めるところや、後頭部の紐を結ぶ所は協力して行うようにした。

3. 分析方法

1) 生徒による授業評価

本研究において構想した剣道の授業について、生徒がどのように評価したのかを検討するために形成的授業評価（高橋ほか，1994）を毎授業後に実施した。この調査票は、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の4因

表2 実践Ⅰ（剣道具なし）および実践Ⅱ（剣道具あり）の教材一覧

	基本となる動き	ねらい	教材名	方法
実践Ⅰ (剣道具なし)	振り下ろし	剣道の魅力の一つである「打つ」ことを経験する。 剣道の魅力の一つである「打つ」ことを経験する。真つすぐな振り下ろしを身に付ける。	①竹刀打ち	2人組になり、一方は丸めた新聞紙を投げ、他方がそれを竹刀で打ち返す。
			②バレーボール打ち	2人組になり、一方がバレーボールを投げ、他方はそれをまっすぐ打ち返す。
			③新聞紙切り	新聞紙を2人組で持ち、打ち手はその場で竹刀を真っ直ぐに振り下ろし新聞紙を切る。
	足さばき	一足一刀の間合いを理解し、すり足を身に付ける。	④すり足	教師による「前、後ろ、右、左」の声に応じて、生徒は中段の構えで姿勢を崩さないように指示された方へすり足を行う。
			⑤一足一刀	2人組になり、一足一刀の間合いで対面し、一方が前、後ろ、右、左に移動し、他方がその動きに合わせて剣先が離れないように移動をする。
	素振り	正しい姿勢で刃筋の通った面を打てるようになる。	⑥三挙動(素振り)	中段の構えから「1」で竹刀を振りかぶり、「2」で面打ち、「3」で中段の構えに戻る。竹刀を振り下ろしすぎないように、自分の面の高さくらいまで移動する。
打突練習	⑦三挙動(物打ち)		2人組になり、受け手は、竹刀を打ち手の高さに地面と水平に構え、打ち手は竹刀を正確に打つ。また、竹刀を打つ際に雑巾を絞るように意識させ面の高さで竹刀を止めるようにした。	
打ち込み練習	打ち込みと残心をともなった「面打ち」を身に付ける。	⑧打ちこみ	2人組になり、中段の構えから竹刀を振りかぶり、受け手に対して打ちと打ち込み足を同時に行い、打ち終えた後、残心を行う。「面」と発声しながら行う。	
		⑨打ちこみリレー	受け手が3人1列に並び、打ち手は連続で打ちこみを行う。「面」と発声しながら行う。	
実践Ⅱ (剣道具あり)	中段の構え	中段の構えは基礎の構えであり、剣道の構えの中で一番大切な構えである。相手の正中線上に竹刀を崩さないように構える。	①竹刀崩し	2人組になり、中段の構えをし、自分と相手の正中線上の空間を奪い合う。
			②竹刀打ち	2人組になり、中段の構えをし、自分と相手の正中線上の空間を奪い、崩れたところで、相手の中結を打つ。
切り返し	正しい切り返しの稽古のなかで、剣道の構え(姿勢)、打ち(刃筋や手の内)、足さばき、間合いの取り方、呼吸法、さらに強靭な体力や、旺盛な気力、などを養い、「気・剣・体一致の打突」の習得をねらいとする。	③切り返し	2人組で中段の構えから、正面打ちをし、体当たりを行う。前進しながら連続左右面4本、後退しながら連続左右面4本を打ち中段の構えになる。もう一度繰り返し、正面打ちをして残心をとる。	

子により構成されており、各質問項目において「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法により回答を求め、「はい」に3点、「どちらでもない」に2点、「いいえ」に1点を与えて検討した。

2) 剣道に対するイメージ

単元前後における、生徒の剣道に対するイメージについて検討するために、質問紙調査を行った。質問項目は、木原ほか(1983)が行った調査項目を参考に、中学生にとって分かりにくい表現や難しいと思われる項目については削除し、過去の実践をふまえ、「痛い」「くさい」「汚い」の3項目を追加し、全20項目(表3)の調査票を作成した。調査票の各項目の回答については、「大いにあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法を用い、「大いにあてはまる」に4点。「あてはまる」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に1点を与えて、統計処理を行った。なお、自由記述による調査を実施し、内容について意味のまとめりに分類し、剣道に対するイメージの詳細を検討することとした。

表3 剣道に対するイメージの項目

① ずるい	⑥ 道徳的な	⑪ すばらしい	⑮ 肉体的な
② 礼儀正しい	⑦ おそろしい	⑫ きびしい	⑯ 精神的な
③ さわやかな	⑧ 静かな	⑬ 楽しい	⑰ くさい
④ 堂々とした	⑨ かっこうがよい	⑭ 伝統的な	⑱ 荒々しい
⑤ 陰気な	⑩ 痛そうな	⑰ 質素な	⑳ 汚い

Ⅲ. 結果と考察

1. 生徒による授業評価

本研究において構想した剣道の授業について、生徒がどのように評価したのかを検討するために形成的授業評価(高橋ほか, 1994)を毎授業後に実施した。図3は実践Ⅰ(剣道具なし)、図4は実践Ⅱ(剣道具あり)の各授業における形成的授業評価の結果である。

実践Ⅰ(剣道具なし)においては、「協力」において1時間目から高い数値を示した。「意欲・関心」及び「総合」においては、6時間目まで高い水準で推移し、右肩上がりの傾向を示した。また、「学び方」においても、1時間目以降高い水準で推移した。

しかしながら、「協力」では、1時間目以降3時間目

まで低下傾向を示した。生徒同士で助言をする場面を設定していたが、授業を観察していると、ほとんどの生徒の技能が未熟であるため、お互いに助言をすることができなかったと考えられる。また、5時間目は、「成果」及び「意欲・関心」において、得点が低下した。その原因として、5時間目は一挙動を行ったのだが、できない生徒が多くなってしまったことが原因であると推察される。

診断基準（長谷川，1995）と照らし合わせると、単元を通してすべてが診断基準最高の5または4であり、生徒が評価するよい授業であったといえる。

実践Ⅱ（剣道具あり）においては、単元を通して総合的に高い値を示した。特に「協力」において1時間目から高い数値を示した。「学び方」では、3時間目まで上昇し、3時間目以降ほぼ横ばいに推移した。また、「意欲・関心」においても、2時間目以降から高い水準で推移した。

3時間目の授業では、剣道具をつけての活動が多くなった。剣道具を装着して「一本」を目指して打つという課題に対して、剣道具なしの時に打った面打ちと、剣道具を装着して打つのでは、視界が狭く、慣れていないと剣道具により動きが制限されることから、圧迫感を感じ、思い描く動きができず「成果」の得点が下がったことが推察できる。

診断基準（長谷川，1995）と照らし合わせると、1時間目の「意欲・関心」以外は、すべてが診断基準最高の5または4であった。すなわち、生徒が評価するよい授業であったといえる。

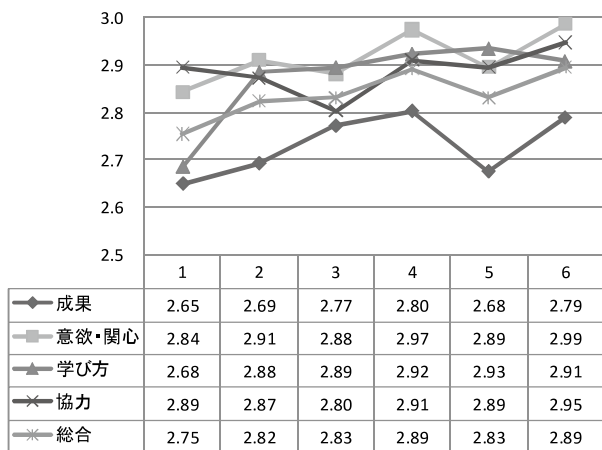


図3 実践Ⅰ（剣道具なし）の形成的授業評価

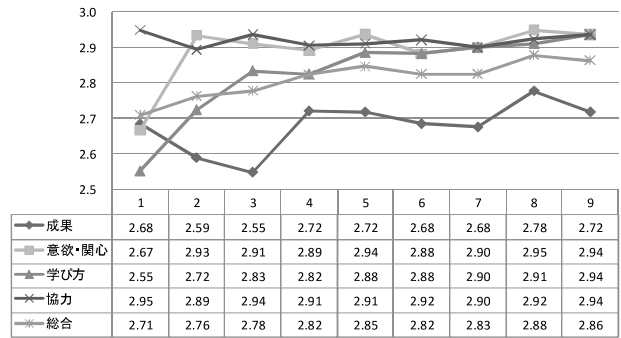


図4 実践Ⅱ（剣道具あり）の形成的授業評価

2. 剣道に対するイメージの変容

単元前後における生徒の剣道に対するイメージについて検討するために、質問紙調査を行った。表4は、単元前後における生徒の剣道に対するイメージの変容とt検定の結果について示したものである。

t検定の結果、実践Ⅰ（剣道具なし）では、「②礼儀正しい (p<.05)」「③さわやかな (p<.01)」「⑦おそろしい (p<.01)」「⑩痛そう (p<.05)」「⑪すばらしい (p<.01)」「⑬楽しい (p<.01)」「⑲荒々しい (p<.01)」の各項目において有意差が認められ、実践Ⅱ（剣道具あり）では、すべての項目において有意差は認められなかった。

これより、実践Ⅰ（剣道具なし）では、剣道に対するイメージは授業前より好転したことが示唆された。しかしながら、実践Ⅱ（剣道具あり）において、すべての項目において有意差が認められなかったことから、剣道特有の雰囲気味わわせることができなかったと結論づけるのは早計である。

実践Ⅰ（剣道具なし）において有意差が認められた項目について、実践Ⅰ（剣道具あり）の単元後の得点と実践Ⅱ（剣道具あり）の単元前の得点を比較すると、同程度の得点であった。「②礼儀正しい」「③さわやかな」「⑪すばらしい」「⑬楽しい」といった肯定的なイメージについては単元前から得点が高かったこと、「⑦おそろしい」という否定的なイメージについては単元前から得点が低かったことから有意差が認められなかったことが推察できる。また、実際に攻防のある授業でありながらも「⑩痛そう」「⑲荒々しい」といったイメージに有意差が認められなかったことには、一定の評価を与えることができる。

このことから、実践Ⅰ（剣道具なし）では、剣道に対するイメージを好転させることができ、実践Ⅱ（剣道具あり）では、実践Ⅰ（剣道具なし）でのイメージを維持することができたと考えられる。生徒は剣道の特性に触れ、礼儀の大切さに気づき、剣道特有の伝統や文化を感じることができたことが推察できる。

また、剣道に対するイメージの詳細について検討するため、自由記述による回答を求めた。表5は、剣道に対するイメージの自由記述について回答の多かった上位3つを示した。

実践Ⅰ（剣道具なし）の単元前では、「かっこいい」や「伝統的な」といったイメージをもっている生徒もいたが、否定的イメージである「痛い」「難しい」「くさい」「怖い」という記述が多くみられた。しかしながら、単元後では、剣道に対して肯定的なイメージが強くなる傾向がみられた。特に、「礼儀正しい」「格好がいい」「伝統的な」という意見が多く、授業を通して肯定的なイメージに変容したことが示唆された。

また、「静かさ」や「真剣」という意見や、「力強い」や「激しい」と感じていることから、剣道の特性である静かな雰囲気や一瞬の激しい雰囲気を実感できたと考えられる。一方で、剣道に対して否定的イメージをもつ生徒も数名いた。特に、上手になりたい気持ちはあるが、上手くできないことに対しての意見として、「難しい」と記述する生徒がいた。

これらの結果から、剣道具なしによる竹刀のみを使用した剣道の授業を通して、生徒の剣道に対するイメージは肯定的に捉えられるようになり、剣道の特性を理解し、感じることができたことが示唆された。一方、「難しい」というイメージが挙げられたことから、時間をかけてスモールステップの指導をすることによって、剣道が難しいと感じる生徒は減少することが考えられる。

実践Ⅱ（剣道具あり）の剣道に対するイメージについては、自由記述からも変容はみられなかった。

表4 単元前後における剣道に対するイメージの変容

項目	実践Ⅰ（剣道具なし）:N=38					実践Ⅱ（剣道具あり）:N=38				
	単元前		単元後		t値	単元前		単元後		t値
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
① ずるい	1.37	0.59	1.24	0.54	-1.09	1.11	0.39	1.26	0.61	1.29
② 礼儀正しい	3.63	0.67	3.92	0.36	2.22 *	3.97	0.16	4.00	0.00	1.00
③ さわやかな	2.45	0.95	3.00	0.93	2.89 **	2.76	0.88	2.97	0.94	1.16
④ 堂々とした	3.76	0.54	3.82	0.56	0.42	3.87	0.34	3.92	0.27	0.81
⑤ 陰気な	1.63	0.67	1.71	0.80	-0.55	1.74	0.89	1.68	0.99	-0.22
⑥ 道徳的な	2.58	0.92	2.82	1.01	1.25	2.53	0.83	2.82	1.01	1.51
⑦ おそろしい	2.39	1.00	1.76	0.85	-3.54 **	1.95	0.96	1.66	0.85	-1.48
⑧ 静かな	2.53	1.18	2.95	1.04	1.90	2.84	0.95	2.50	1.13	-1.36
⑨ かっこうがよい	3.34	0.88	3.37	0.94	0.15	3.50	0.80	3.39	0.72	-0.59
⑩ 痛そう	2.84	1.24	2.39	0.95	-2.25 *	2.89	0.95	2.71	0.84	-1.10
⑪ すばらしい	2.79	0.93	3.24	0.91	2.74 **	3.24	0.85	3.29	0.69	0.27
⑫ きびしい	3.42	0.68	3.32	0.84	-0.64	3.39	0.79	3.29	0.73	-0.64
⑬ 楽しい	2.50	0.92	3.11	0.86	3.83 **	2.71	0.87	2.92	0.91	1.02
⑭ 伝統的な	3.71	0.65	3.79	0.47	0.83	3.68	0.57	3.71	0.52	0.20
⑮ 質素な	2.76	1.02	3.00	0.96	1.50	3.00	0.99	2.87	1.07	0.53
⑯ 肉体的な	2.66	1.02	2.84	0.89	1.13	2.76	1.00	3.13	0.88	1.72
⑰ 精神的な	3.37	0.88	3.29	0.77	-0.55	3.66	0.63	3.68	0.47	0.23
⑱ くさい	2.24	1.10	1.87	1.02	-1.87	2.13	1.07	1.97	0.97	0.64
⑲ 荒々しい	2.53	1.06	1.89	0.89	3.54 **	2.08	1.00	2.21	1.02	0.57
⑳ 汚い	1.74	0.86	1.45	0.72	-1.10	1.66	0.85	1.63	0.91	0.13

*:p<.05 **:p<.01

表5 自由記述からみた剣道に対するイメージの変容

		単元前	記述数	割合	単元後	記述数	割合
実践 I	肯定的	・カッコいい	10	25.6%	・礼儀正しい	15	40.5%
		・伝統的な	9	23.1%	・カッコいい	9	24.3%
		・打ち合い	7	17.9%	・真剣な	8	21.6%
	否定的	・痛い	7	17.9%	・けがをする	1	2.7%
		・怖い	2	5.1%	・冷たい	1	2.7%
		・くさい	1	2.6%			0.0%
実践 II	肯定的	・礼儀正しい	12	30.8%	・礼儀正しい	12	32.4%
		・カッコいい	10	25.6%	・カッコいい	6	16.2%
		・強い	4	10.3%	・正々堂々	3	8.1%
	否定的	・痛い	2	5.1%	・はげしい	2	5.4%
		・しんどい	1	2.6%	・痛い	1	2.7%
		・厳格	1	2.6%	・厳格	1	2.7%

IV. おわりに

平成24年度より、中学校第1・2学年における「武道」の必修が完全実施となる。そのため、「武道」の授業モデルの提案及び授業実践は、移行期である現在の早急な課題と考えられる。本研究は、附属中学校における剣道の2実践（実践I：剣道具なし、実践II：剣道具あり）を通して、その授業の成果とともに、生徒の剣道に対するイメージの変容を検討することを目的とした。単元計画や教材・教具を附属中学校と連携して構想し、剣道具なしの竹刀のみで展開する授業（実践I）と剣道具ありの授業（実践II）を実施した。その結果、以下の4点が明らかとなった。

- 1) 生徒による形成的授業評価（高橋ほか，1994）を診断基準（長谷川，1995）に照らし合わせた結果、実践I（剣道具なし）、実践II（剣道具あり）の両実践において、診断基準の最高の5あるいは4であったことから、生徒にとって十分に満足できる授業であったといえる。
- 2) 実践I（剣道具なし）の授業では、剣道具を装着せず、「面打ち」の習得をねらいとした結果、剣道に対するイメージは好転したことが示唆された。これより、新聞紙を切ったり、ボールを打ったり、判定試合を行ったことにより、6時間という短い単元であっても剣道の楽しさを味わわせることができたと推察できる。
- 3) 実践II（剣道具あり）の授業では、剣道具を装着し「攻防」を行った結果、イメージの変容において有意差は認められなかった。しかしながら、実践I（剣道具なし）の単元後の得点と実践IIの単元後の

得点は、同程度であったことから、実際の打ち合いを体験しながらも、「②礼儀正しい」「③さわやかな」「⑪すばらしい」「⑬楽しい」といった肯定的なイメージは維持しながら、「⑩痛そうな」「⑲荒々しい」といった否定的なイメージが高まることがなかったという点において一定の評価を与えることができる。

4) 実践I（剣道具なし）、実践II（剣道具あり）の両実践において、単元後の生徒の自由記述から、礼儀作法に関する内容や思いやりの気持ちや感謝の気持ちなど心の大切さに関する内容がみられた。これより、剣道を通して、心身ともに鍛えたり、礼儀を正したりすることが期待できることが示唆された。

本研究では、剣道具なしの竹刀のみで展開する授業（実践I）と剣道具ありの授業（実践II）の両実践について、生徒による授業評価と剣道に対するイメージの変容について検討したに過ぎない。今後は、生徒の学習成果について、より詳細に検討していくことが課題である。

付記

本研究は、平成21年度愛媛大学教育学部学部・附属学校園共同研究助成（学部GP）を受けて行われた研究である。

文献

長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子（1995）小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み。スポーツ教育学会14（2）：91-101。

木原資裕・今井三郎・小原晃（1983）正課体育「剣道」受講生における剣道のイメージについて。日本体育学会大会号34，p.794。

文部科学省（1999）中学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房。

文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房。

岡嶋恒（2009）だれにでも指導できる剣道の授業モデル。体育科教育57（15）：22-25。

柴田一浩（2008）「ダンスと武道」の必修化で直面する課題をどう解決するか。体育科教育56（6）：40-43。

高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎（1994）体育授業の「形成的評価法」作成の試み：子どもの授業評価に着目し

て、体育学研究39：29-37.

山神真一（2009）新しい剣道の授業づくりをめざして

－誰でもできる剣道の指導法、体育科教育57（15）：
30-33.

全日本剣道連盟（2009a）剣道授業の展開.

全日本剣道連盟（2009b）剣道指導要領.